

〔講演〕

覚王山日泰寺をめぐる外交と観光

林 淳

HAYASHI Makoto

1. 日泰寺とタイ

ご紹介をいただきました林淳です。南山宗教文化研究所のローチ研究員をつとめております。愛知学院大学で長年教員を務めてきました。毎年一年生の学生と、日泰寺とその周りの覚王山商店街のフィールドワークを行っています。今回は、日泰寺のことを近代仏教史の視点から眺めてみたいと思います¹。

地下鉄の覚王山駅の近くに日泰寺はありますから、ここ南山大学からもそれほど遠くはありません。本山駅まで行きますと、愛知学院大学の楠元キャンパスもあり、城山八幡宮や昭和塾堂もあります。日泰寺は、毎月の21日に行われる弘法市でも有名です。たくさんの店が出て、賑わいます。日泰寺のそばには八十八ヶ所の霊場があり、21日には、普段閉まっているお堂が開いていることもあります。

日泰寺は、タイとの歴史的なつながりがある寺です。タイがシャム（暹羅）と呼ばれていた時には、「日暹寺」と名乗っていました。本尊は釈迦像で、タイの国王であったラーマ5世（チュラロンコーン王）から贈られたものです。日泰寺が創設されるもとになった仏骨は、奉安塔に安置されております。これも、ラーマ5世が日本に贈られたものでした。本堂の前には、ラーマ5世の像がありますが、花が供えられていることがあります。日本にいるタイの人たちが花を供えていると聞いたことがあります。釈迦像、仏骨、国王像のいずれもラーマ5世に関わるものです。日泰寺は、歴史的にラーマ5世やタイの王室と深い絆をもった寺院として知られています。

1. 2023年7月6日に南山宗教文化研究所ローチ基金研究員講演会として同タイトルで発表を行った。発表の録音をもとにして本論文を書きおろした。講演会を準備いただいた宗教文化研究所の守屋友江、石原和、末村正代の3先生に感謝を申し上げる。

2. タイの近代化

ラーマ5世は歴代の国王のなかで際だった存在のようです。今でもたいへん尊敬されています。ラーマ5世の名前に因んだチュラロンコーン大学は、最高の学府になっています。ラーマ5世に由来するお守りもあるそうです。ラーマ5世が国民的な人気をもち続けているのは、その在位時期に関係します。彼の在位は、1868年から1910年の間です。日本では1867年から1912年まで在位した明治天皇の時代にあたります。二人の王は在位期間が重なり、同じ時代を生きていたこととなります。西欧の列強国家がアジアに進出し、アジアの諸地域が植民地化されていくなかで、タイでは王室が中心となって国王がリーダーシップをとって近代化の改革を行いました。ラーマ5世の改革はチャクリー改革と呼ばれ、奴隷解放、学校教育、議会設立、サンガの統一に及びました²。

タイの場合、東からはフランスが、西からはイギリスが侵略してきます。タイは、自分の領土を割譲しながらも独立を維持していく方途をとります。イギリスには、フランスとの間で緩衝地帯を作るという考え方があったようです。ラーマ5世は、イギリス流の近代化を目指したといわれます。他方でラーマ5世は、ロシアのニコライ2世ともつながりました。ラーマ5世はニコライ2世をタイに招待して、自らの息子、チャクラポン王子をロシアに留学させています³。タイにとってロシアは大事な友好国でした。日本とのつながりは、国際的に孤立しないためにもタイにとって大切であったと思われます。1898年にタイと日本との間で修好通商条約が結ばれます。この時に条約締結に関わったのが、外交官の稲垣満次郎でした。この人が、仏骨奉迎を計画した立役者でした。

日本は近代にあたって天皇制を復活させて、皇室を中心とした政治体制が作られました。国民を統合するために伝統的な王制の復活が都合がよかったと思われます。天皇制は、国家神道と言われる神社制度と密接に関係していました。タイの場合にはラーマ5世がサンガの統一を行ったように、仏教が王室に結びついていました。国教としての仏教です。日本では近世に確立した寺請制度は、ある意味では国教でした。近代には仏教寺院を使った国教制はなくなりましたが、国家神道という新しい国教制ができました。王室と宗教制度が相互に支えあう構造という点では、近代のタイと日本は似ています。近世には国教の扱いであった日本の仏教も、近代になると民間の団体になります。とくに1894年に教導職が廃止になった後、政府は仏教宗派や教派神道教派に対して宗制、教法を制定し、自治的な組織を作るように命じます。自治的な組織をつくるのは、実はなかなか大変なことでした。これ以降、仏教宗派は民間の団体になったと考えられま

2. 「タイの近代国家の形成」(『新版世界各国史5 東南アジアI』山川出版社、1999年)

3. 同上

す⁴。タイと日本では、国家仏教と国家神道の違いがありましたが、王室が宗教制度と相互に支えあう関係があった点で共通しています。18世紀から20世紀にかけてヨーロッパでは王室がなくなるところがありました。フランス革命では王のルイ16世の首は切られました。ヨーロッパでは王室の危機があったわけですが、タイ、日本では王室が中心となった近代国家が作られました。王室と宗教制度とが相互に支えあう構造をつくったのは、国民的なまとまりを重視し、国内の分裂を避けたかったからだと思います。

3. 稲垣満次郎の構想

稲垣にはたくさんの著作があり、それを読みますと、日本は海洋国家であるとお書きしております⁵。海洋のルートを通して世界につながっていて、日本は世界の貿易や流通の中心になりうるという意見です。東南アジアとのルート、環太平洋のルート、日本海を通してルートがあって、それぞれの海のルートを開発して貿易を活発にしていくと稲垣は述べています。ロシアのシベリア鉄道がもう出来てくるので、ロシアとも貿易をしたらよいという考えがあります。国際政治の中心点は東漸するという認識が、稲垣にあったと指摘されています⁶。イギリスとロシアの対立点は東ヨーロッパから中央アジアに移しますが、それは世界を動かす原動力が東漸している根拠であるといえます。いつかは日本がある太平洋地域が中心点になるのです。ところで世界の経済は西漸し、その中心はイギリスからアメリカに移動し、世界最大の商業国のアメリカと中国が結ばれるならば、東洋が最大の市場になると稲垣は見ています。世界の交通網、流通網の結節点に日本はいるわけです。彼がタイの位置を重視したのも、こうした認識によっていたと考えることができます。稲垣が書いた東方策の地図をあげておきます⁷。稲垣が、ラマ5世に仏骨の授与を願った背景には、稲垣の国際政治の見通しがあったことは想定してよいと思われれます。タイと日本が同じ仏教国なのだから、二つの国はより親密な関係が築けると稲垣は考えていました。たしかに日本には寺院が多くあり仏教的な行事も行われていま

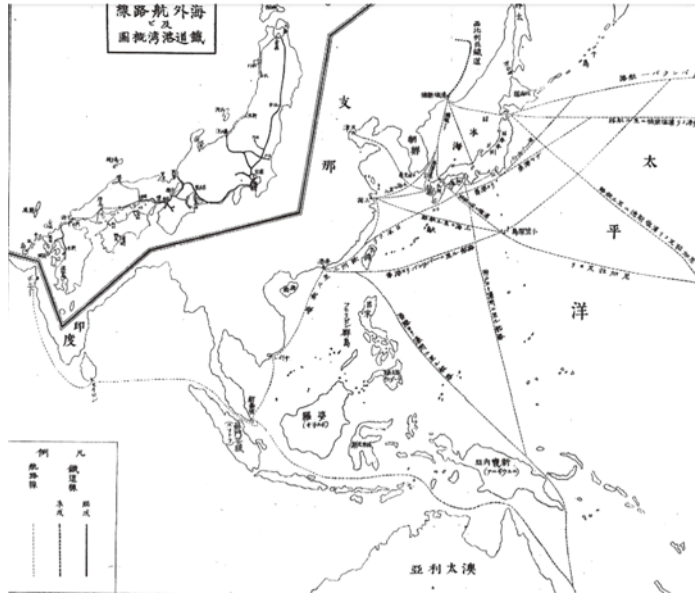
4. 教導職廃止後の仏教、教派神道は公認教になったと理解する見解があるが、筆者はその説を採用しない。公認教制度を提唱した研究としては、新田均『近代政教関係の基礎的研究』大明堂、1997年。

5. 稲垣満次郎については、顕原善徳「稲垣満次郎論—明治政府と太平洋・アメリカ—」『ヒストリア』160号、1998年、佐藤照雄「明治後期の対タイ文化事業—稲垣満次郎の仏骨奉迎事業を中心に—」『早稲田大学大学院アジア太平洋研究科紀要』19号、2010年、中川未来「一九世紀末日本の世界認識と地域構想—「東方策士」稲垣満次郎の対外論形成と地域社会への展開—」『史林』97(2)、2014年、村嶋英治「稲垣満次郎と石川舜台の仏骨奉迎に因る仏教徒の団結構想—ピブラワ仏骨のタイ奉迎から日本奉迎まで(1898-1900)』『アジア太平洋討究』43号、2022年などの研究がある。

6. 注5の中川論文

7. 稲垣満次郎『東方策結論草案』（哲学書院、1892年。国会図書館デジタルコレクション）の124頁と125頁の間にある折込の地図。

すが、近代日本は天皇中心の国家神道の国に変わっていました。同じく仏教国といっても、近代のタイと日本とでは、仏教がもつ社会的な位置が違っていました。



4. 仏骨奉迎

イギリスの考古学者であるウィリアム・ペップが、釈迦の本物の骨を見つけたというニュースが世界を広がったことがありました。イギリス政府は、それをタイの王室に贈与しました。タイは仏骨を政治的に利用します。最初に贈られたのは、ロシアでした。ロシアにはチャクラポン王子が留学し、軍事を学びました。チャクラポン王子が母国のタイに帰った時に、ラーマ5世が渡します。ロシアには、モンゴル系のブリヤート人がいて、仏教徒でした。その後、ラーマ5世はビルマとスリランカに仏骨を贈りました。それを見ていた稲垣は、日本にも贈与してくれないかとタイ政府に打診します。ラーマ5世の許可が下りて、日本から奉迎のための人が派遣されます。仏教界の代表者が行くわけで、稲垣も付き添います。ラーマ5世や王室の信頼は篤かったようです。日本とタイの修好通商条約で稲垣が活躍し、実績もありました。フランスがタイを攻めてきて、領土はどんどんどんどん小さくなった頃のことです。ラーマ5世は心を痛めてノイローゼ気味だったとも言われています。ラーマ5世は、日本との関係づくりに積極的であったことは十分に予想されます。

ラーマ5世としては、同じ仏教国の日本に贈与するのであって、国家と国家との信義の問題であったと思われます。稲垣が動いて、仏骨奉迎が実現しますが、稲垣個人が動

いているのであって、外務省が正式に関与していたわけではなかったようです。稲垣がそうした動きを外務大臣に報告はしています。外務省は稲垣の計画の報告を受けていますが、外務省が組織として動いていないのです。タイの日本公使の稲垣の個人プレーであったと見ることはできます。ラーマ5世は、国家と国家との間の約束事と考えていたと思われるかもしれませんが、そこにズレがあったと私は見ております。日本が仏教国だと言っても、仏教を国教にはしてはしません。国教になっているのは国家神道です。仏教教団は、民間の団体に過ぎません。

明治33年にタイに仏骨奉迎の使節団が派遣されます⁸。明治30年代はじめには内地雑居が話題になって、治外法権が撤廃されると、外国人が日本国内で居住できるようになる、どうしたらよいかということが議論されました。それは、同時に外国人宣教師の活動が活発化しキリスト教が広がると考える人もいました。仏教界が内地雑居の問題を警戒し、キリスト教の進出に対抗し、政府に対して仏教を国家の公認教にすべきだという仏教公認教運動を展開します。仏教各宗派が、足並みを揃えていました。仏骨奉迎の話も、そのころに仏教界に舞い込みました。稲垣は、各宗派管長宛てに手紙を書きます。そこでは「陛下ノ聖旨特ニ之ヲ或ルー派ニ贈ルニアラスシテ我邦仏教徒全体ニ賜フモノニ御座候、右ノ次第第二候得旨我邦仏教各宗派ノ中ヨリ可成高德博学ニシテ英語ヲ能クスル仁数名ヲ委員ニ御撰ヒ相成至急御派遣相成度候⁹」とあり、仏教界全体で引き受けることが期待されています。そこで各宗派の管長が集まって対応することになりました。仏骨奉迎には大いに沸きたちましたが、仏骨を安置する寺院を建立するとすると、広い土地と莫大な費用がかかります。その費用をだれが出すのか。外務省をふくめて政府は関与していませんから、国費が出ることはありえないことでした。仏教各宗派は、仏骨奉迎には総論で賛成でしたが、負担金になると明確な態度を示しませんでした。

明治33年5月22日に仏骨奉迎の使節団は日本を発ちます¹⁰。奉迎正使は大谷光演(真宗大谷派)、奉迎使は前田誠節(臨済宗妙心寺派)、藤島了穩(浄土真宗本願寺派)、日置黙仙(曹洞宗)でした。ほかに南条文雄を含など随行者14人が同伴しています。使節団は、6月11日にタイに到着し、15日にラーマ5世より仏骨を授与され、7月11日に彼らは帰国します。

仏骨は京都の妙法院に仮に納められます。全宗派でやっていたはずのところ、奉迎団の派遣やその後の安置などで、お金がかかってきます。どうやって借財を返すかという問題がでてきます。どこに仏骨を納めた寺院を建立するのが、なかなか決まりません

8. 同時代の記録としては、岩本千綱『仏骨奉迎始末』仏教図書出版株式会社、1900年、葦名信光『釈尊御遺形奉迎紀要』大日本菩提会本部、1902年。

9. 寺沢玄宗『釈尊御遺形伝来史—覚王山日泰寺奉安塔の由来—』覚王山日泰寺、1981年、40頁。

10. 注8の岩本本の「第二章 奉迎使選定付出發」。

でした。本来ならば仏教界がまとまって寄付金を募って、その寄付金をもって仏骨を納める覚王殿を創建すれば、誰もが納得しやすい解決策だと思いますが、そうはなりません。京都、東京、静岡が候補地として名乗り出ました。名古屋は遅れて、候補地に立候補しました。田代村の村長加藤慶二ら有志が、42万平方メートルの土地の寄進を申し出ました¹¹。これをきっかけにして名古屋市の仏教界、財界、官界が動いて、覚王殿誘致の発起人になりました。稲垣は、名古屋誘致の話聞き、賛意を表します。明治35年7月28日から各宗派管長会議が京都で開かれて、9月12日まで続きます。選定地の実地調査があり、11月5日から再開します。同月11日に投票が行われます。それまでの状態について、つぎのようにあります。

此の間に於て選定地の競争は、京都派と名古屋派との対立が深刻化して両々対立して相下らず、策謀を運らし手段をつくし、各その主張を遂行せんとし、宗派会議は名古屋対京都の決戦場の様相を呈して来た。両地の新聞紙は、各々筆鋒を磨して相攻撃し又処々に演説会を広開して之を民衆に訴えた。「言うに忍びず筆するに堪えざるものさえ」出て来て、怪事醜聞も往々にして新聞紙上に花を咲かせ、識者をして顰蹙せしむるほどの極端な論争になったが、遂に三十五年十一月十二日の会議に於て名古屋側の勝利に帰した¹²。

投票では名古屋が勝利します。京都案が敗れたことで、大日本菩提会の会長であった村田寂順は会長を辞め、副会長であった前田誠節も副会長を辞任します。広大な敷地が用意されていたこと、それまでの負債を肩代わりすることを誓約したことが、名古屋に決まった要因だと考えられます。

5. 名古屋の東丘陵地の開発

なぜ名古屋では官民一体となって、タイから来た仏骨を引き受けようとしたのでしょうか。仏教に熱心な土地柄だったというのでは、十分な答えになりません。近世の名古屋は城下町であって、城の中心にして武家屋敷や商業地が広がっていました。日泰寺のあたりや南山大学があるあたりは、名古屋の東丘陵地と呼ばれるところですが、城下町の外側に広がった空間です。農地もあったでしょうが、林、池、荒地があり、自然そのままであったと思われます。今も「猫が洞」「猪高」「鰻はごま」という地名に、開発以前の自然観が残っています。この東丘陵地が開発されて、工場、病院、陸軍の製作所

11. 加藤龍明『微笑みの白塔—釈尊真骨奉安百周年』中日新聞社、2000年、108頁。

12. 注9の98～99頁。

など施設が作られるようになります¹³。明治31年には名古屋で初めての電気鉄道が笹島と県庁前の間をつなぎます。あたらしい寺院の建立は、こうした東丘陵地の開発を頭に描いていた政治や経済界の人たちによって誘致されました。明治44年に電気鉄道が日暹寺のある月見坂まで開通します。電車の終着地が日暹寺になったのです。鉄道の開通については、つぎのような説明があります。

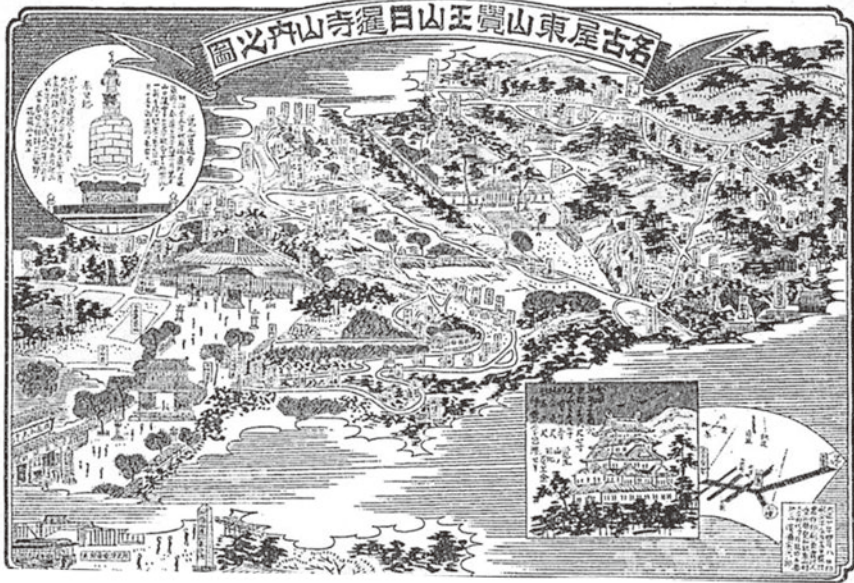
明治三十三年、中央線千種駅の開業、同四十五年名古屋鉄道覚王山線、尾張電気軌道線（ともに市電に編入）が開通して、交通の便にめぐまれ、後に工業地帯として一区を形成する基礎ができあがった。愛知県千種町、東山村などの一部が名古屋市の市域に入ったのは、明治四十二年十月一日、大正十年八月二十二日にはその大部分が名古屋市に合併した。兵器支廠、名古屋機器製造所、松村製陶所、日本麦酒会社があいついで設けられ、さらに付近の住宅地化が進められた。南部の吹上と、北部の都通村付近は特にそれが著しく、この結果、仲田、今池方面は、名古屋市東部の一繁華街として成長した¹⁴。

細かいことを付け加えると、明治43年1月に覚王山電気軌道という会社が設立されますが、明治44年8月に名古屋電気鉄道によって、北畑から月見坂までの線が開業し、翌明治45年5月に西裏まで延伸します。日暹寺とその周囲は、行楽地となって人々が集まる憩いの場になりました。また鉄道が開業し、そのまわりは住宅地が増えていきました。つぎにあげるのは、大正10年の日暹寺の絵です¹⁵。当時はやりの鳥観図になっています。左下の方に、月見坂という電気鉄道の駅名が小さく見えます。大正7年にできた仏骨を納めた奉安塔も見えます。左上に拡大図もあり、名所になりつつあったことがわかります。右上に名古屋城も書かれていて、名古屋市以外からの観光客にとって便利な地図であったと考えられます。日暹寺のまわりには、八十八ヶ所の霊場がずっと広がっています。

13. 千種区制施行50周年記念事業実行委員会編『千種区制施行50周年記念誌 千種区史』1987年、113～114頁。

14. 『千種区の歴史』愛知県郷土資料刊行会、1981年、150頁。

15. 『やまのて音楽祭 2003 パンフレット』城山・覚王山地区魅力アップ事業実行委員会、2003年、13頁。



この八十八ヶ所の霊場は、日蓮寺の創建された後に作られたものです。明治42年に先達の山下圓救（俗名は山下五右衛門）が発起人となって、日蓮寺境内に八十八ヶ所の霊場を造るために勧進を行い始めました。その折に世話人に名をつらねたのは、伊藤萬蔵、花木助次郎、奥村新兵衛でした。なかでも伊藤は、全国の寺社に石造物を寄進したことで有名人です¹⁶。彼らが尽力して霊場が造られていきます。四国の八十八ヶ所の霊場を模倣することを「写し霊場」というそうです。日蓮寺のまわりに写し霊場ができたわけです。それは、弘法大師信仰の霊場です。毎月21日には弘法市が立ち、たくさんのお店が出て、今も賑わっています。覺王山は、名古屋の遊覧名所になっていきます。先に述べたように、明治44年に電気鉄道が月見坂までつながります。東丘陵地の開発を計画していた政財界のやり手が、仏骨を奉納する寺院を名古屋に誘致し、東丘陵地の風景を変えたわけです。人々は、電気鉄道に乗って日蓮寺や八十八ヶ所の霊場や弘法市にお参りに来るようになります。

6. 三人のイトウ

日蓮寺の写し霊場ができるにあたって、世話人になった伊藤萬蔵について説明をいたします。伊藤萬蔵は、知っている人は知っている人物です。寺院や神社にお参りし、入

16. 市江政之『石造物寄進の生涯 伊藤萬蔵』ブックショップマイタウン、2011年。

り口や境内にある石造物に関心をもっている人にとっては、カミサマのような存在です。日本中の寺院、神社において伊藤萬蔵が寄進した石造物がないところはないくらいに、全国津々浦々に伊藤萬蔵の名前を刻んだ石造物があります。この人の経歴はよくわかっていません。天保4年（1833）に現在の一宮市最の農家に生まれ、名古屋城下に丁稚奉公をしていました。米の先物取引をする延米商の丁稚をして、ある年齢になってから暖簾分けを許されて、みずからの店を構えたようです。才能があったためか、米の先物取引で財をなし、金融業にも関わりました。明治維新で武士が手放した土地を取得して、借家を建てて、長者になったと言われています。いまの日泰寺の山門近くの第一札所のそばにも、伊藤萬蔵の石塔があります。伊藤萬蔵の貢献だけではないですが、四国霊場ができたことが、日暹寺が賑わいのある門前町を形成する上で一役買ったことは間違いありません。

松坂屋の初代社長であった伊藤祐民という人がいます¹⁷。日暹寺のそばに邸宅を構えて、そこが名古屋の政財界の人が集まる場になっていました。揚輝荘という名称で、いまは名古屋市所有の施設になっています。伊藤祐民は、ビルマのウー・オッタマという僧侶と親交を結び、戦中時代はアジアからの留学生を揚輝荘で引き受けていました。さらにもう一人は伊東忠太です¹⁸。奉安塔を設計した人です。東京大学の教授でしたが、設計者としても知名度が高く、平安神宮、築地本願寺などを設計しています。日本離れた、中央アジアの雰囲気のある建物が多そうです。

7. まとめ

私の話をもう一度振りかえります。第1に、19世紀末から20世紀にかけての国際情勢の問題。ラーマ5世によるタイの近代化の話です。稲垣満次郎が仏骨奉迎を発案し、タイ政府に打診します。国際情勢の中でタイと日本との信頼関係のなかで、稲垣が実行します。稲垣には海洋国家論があり、その面を出していくことで日本は国際社会で活躍できる余地があると考えていました。第2に、仏骨を受け取ることになった日本の仏教界です。仏教界としては各宗派の管長が集まり、話し合いの機会がありますが、なかなか寺院地の建立がまとまらずに時間が過ぎていきます。宗派をこえた意思決定が、いかに困難であったかを知ることができます。日本の仏教界を弁護しますと、上座仏教とは異なって信仰の焦点が釈迦に一元化されているわけではありません。本尊が、阿弥陀仏

17. 伊藤祐民と揚輝荘については、上坂冬子『揚輝荘、アジアに開いた窓―選ばれた留学生の館』講談社、1999年。

18. 伊東忠太に関しては多くの研究書があるが、さしあたり読みやすいものとして、鈴木博之『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003年。

であったり大日如来であったりと様々です。そのことも、各宗派の利害を調整することを難しくしていたように思われます。第3に、仏骨の受け入れに立候補した名古屋市の当時の事情です。明治後半期から大正年間にかけて名古屋の東部丘陵地の開発が進みます。地元の有力者や政財界が覚王殿の誘致に関心をもったのも、産業革命を伴った都市開発を計画していたからだったこととなります。電気鉄道の敷設は、まさにその象徴です。この3つの層が相互に関連しながら、仏骨奉迎、日暹寺建立、奉安殿の完成が為されていきます。異なる次元の層が相互に作用しつつズレや錯誤を生みながらも、多くの人を巻き込んで歴史が展開していく過程を知ることができます。その点で、覚王山日泰寺は「外交と観光」の視点から見て魅力のつきない歴史的空間だと思っております。

仏骨奉迎の年表¹⁹

明治 31年 1月	ウィリアム・ベッペが仏骨の発掘
33年 1月 27日	稲垣満次郎がテワウオン外務大臣に仏骨授与を願う
2月	稲垣が各宗管長に委員派遣を依頼
4月 18日	各宗派会議で検討
33年 5月 22日	奉迎使節団が神戸港出発
6月 11日	使節団がタイに到着
6月 15日	ラーマ5世から仏骨授与
7月 11日	使節団が帰国
7月 19日	京都妙法院に仏骨を安置
9月 25日	『教学報知』で仏骨奉迎団への批判が出る
34年 2月 19日	各宗派管長会議で会則改正、負債が議論される
4月 18日	日本大菩提会が改めて発会式。村田寂順が会長
12月 6日	鴨東銀行が日本大菩提会を差押え
35年 1月 20日	日本大菩提会名誉会監会で京都、東京、静岡が候補地として提案される。
7月	名古屋に御遺形安置選定期成同盟会ができる
8月 27日	名誉会監会が開催されるが、流会を重ねる
10月 2日	各宗派管長及び各宗派重役合同会議
35年 10月 12日	同会議で覚王山建設地を名古屋に決定
11月 15日	仏骨は名古屋に運ばれる
36年 10月 12日	内務省が日暹寺設立許可
37年 11月 15日	仏骨が万松寺より田代村の仮本堂へ移動
44年 8月 19日	名古屋電気鉄道が月見坂まで開通
大正 7年 6月 15日	奉安塔が完成

19. 注9、11の本、藤田和敏『悲劇の宗政家 前田誠節—臨濟宗妙心寺派の近代史』(法蔵館、2021年)を参照し年表を作成した。

覚王山日泰寺をめぐる外交と観光

はやし・まこと
(愛知学院大学客員教授)